

# 表現と解釈

木田翔一 (Shoichi KIDA)

千葉大学大学院人文社会科学研究科

ものごとを自由な仕方で色々な観点のもとで多様に見ることができるということは、人がなにかよくわからないものごとに直面した際に、そのわからないものごとをわかるものごとに変える際の試行錯誤に役立つという点でも、大事である。ものごとのそれそのものの本性なるものを探求しようという動機だけでなく、何か他のものとの関係においてそのものごとを考え、様々な見方のもとでの利用の可能性を探ろうという動機にも、そのように色々な観点のもとでものごとをみてとれるということは役に立つ。人が新しく「表現」を導入してその思考の幅を広げようとするとき、そこでは同時に新しく観点をも導入して、ものごとの新しい見方をつくる試みが行われていると考えることもできよう。本発表は、そのように密接に関連している表現と観点の関係に注目し、表現との関係で何らかの仕方で観点が現れることを「解釈」と呼び、表現を使って人が新しく見方を得ることができる仕組みについて考え、そのモデルの素描を試みる。

人はすでにある「表現」を借りて利用するだけでなく、新しく「表現」をつくることができることに注意すると、その際の表現の構造の規定に影響する「観点」の導入がどのような仕組みと構造に則ったものであるかということにも目を向けざるを得ない。人がものごとの何かの側面に着目してその「表現」をつくるとき、その際にもものごとの特徴を抽出するポイントやレベルはさまざまである。たとえば、絵を描くときに人の目の大きさや鼻の形を正確に保つ必要は、必ずしもない。目的や好みに応じて、様々な抽象化が可能であり、そうした色々な観点のもとで「表現」が作られうる。「つくる」過程においては、様々な観点のうちどれがいいか、比べる必要もでてくるかもしれない。そうした観点多層性とも言える側面を可視化することのモデル化（構造の抽出）を考えると、各観点の導入（もとのものごとの構造と表現の構造を対応させること）同士の関係に焦点を当てることが重要となるだろう。

構造間の対応という形での観点というものの見方についてのモデル化は、すでに手元にある手がかりを利用してものごとを理解する際の、手がかりの照らし合わせ方のようなものである。